

三谷うた 河崎いなり 大明神 鎌倉道心

日参や 古作ほとけに おんす。め いつ

も絶せぬ 觀世音 三谷へ通ふは 駄賃馬

八文もりの けんどんや 浅草町は よね

饅頭 以下江戸順禮の條に抄出

一時の戯文幸に存て、百五十餘年の昔を見るがごとし、肥前節のこと、きぶれ道行、又酒餅論に、さてめんるゐの長せんぎ、のびくにして、うどんけなり、そばきりたてられいかせん、さうめんだうなることはいや、敵きり麥こそおもしろけれど、けんどんさうにぞ見えにけるとあり、此草紙の畫風を見れば、萬治の比の物のやうに思はるれど、前にいふごとく、むかしく物語に、寛文四年けんどん蕎麥切といふ物出來とあれば、酒餅論も寛文中の印本なるべし、むかしく物語に記されしことは、大むね不違。略 中

提重と江戸鹿子にあるは、一名を大名慳貪といふ、麿惡なる蒔繪をし、又青貝にていさ、か粧ひたるものあり、正徳の比までも流行て、其器は今に存、好事の人茶簾筒等に用ひて、人の知るところなれば、圖を摸さず。略 中

〔嬉遊笑覽飲食上〕慳貪は唯俗に覺えたるやさしみなき意にて、一椀づ、盛たるを、食ふ人の心にまかせて勧もせざるゆゑなり、其定になれり、大かた同時なるべし。其賣始りて、何くれの物み、其呼聲にも一杯六文かけねなし、現金かけねなしといふこと、其頃のはやりなり、外に持運ぶに膳に入る箱はけんどん箱なるを、やがてけんどんとばかりいひ、其箱の蓋の如きを、けんどんぶたといふ、大名けんどんといふは、一代男、女郎ども食好みする處、なま貝のふくらいうりを、川口屋の帆かけ舟の重箱に一杯と、思ひくに好まる、こそおかしければとある、其重箱なり、帆かけ舟は、諸大名の舟を五色の漆にて、繪にかきたるなり、西國の大名難波にて儀して出た、大名けんどんの名はこゝに起る、今も此器殘れるもの有て、好事のもの茶箱に用、小く長き形の筥なり、蒔繪は帆かけ舟のみにあ